

## 書評：程小娟『God 的汉译史—争论、接受与启示』

社会科学文献出版社、2013 年

金香花

程小娟は、中国河南大学文学研究科の准教授であり、研究方向が聖書の漢訳史、聖書文学、比較文学である。指導教授であった梁工先生が編集した『聖書解説』の中で聖書翻訳史部分を担当した時から聖書翻訳に関心を持つようになり、博士課程においては聖書漢訳に集中し、神の訳語まで関心を絞るようになった。

本書は程の学位論文を改定して出版したものである。本文が 260 ページになり、豊富な内容を包括している。内容の概観は目次から獲得することができる。

### 序論

- 一、研究動機
- 二、方法論
- 三、本書の内容紹介
- 四、期待される成果
- 五、用語説明

### 上編 God の訳語問題に対する宣教師たちの論争及びそれからの考察

序

#### 第一章 God の訳語論争の歴史

- 第一節 明末清初カトリックでの訳語論争
- 第二節 初期プロテスタントにおける訳語論争
- 第三節 1877 年中国プロテスタント宣教師大会前後の訳語論争
- 第四節 1890 年中国プロテスタント宣教師大会前後の訳語論争

#### 第二章 プロテスタント宣教師による訳語論争の中での主な紛議点

- 第一節 宣教師の原文理解への紛議点
- 第二節 受容語理解に対する宣教師間の紛議
- 第三節 当時の読者に対する宣教師の異なる見解
- 第四節 宣教師たちが自身の伝統に対する異なる理解および個人傾向の差異

#### 第三章 プロテスタント宣教師たちが提案した解決方法

- 第一節 妥協の提案

第二節 不妥協の提案

#### 第四章 宣教師による訳語論争に対する考察

第一節 翻訳可能と不可能の間

第二節 解釈の衝突と解決

第三節 伝達の難問

#### 下篇 **God** が中国歴史上に受容された状況及び訳語問題への啓示

##### 第一章 明末清初士大夫の **God** 及びその訳語への理解

第一節 キリスト者たちの理解

第二節 反キリスト者たちの理解

##### 第二章 19世紀プロテスタント受容者たちの **God** 及びその訳語への理解

第一節 プロテスタント初期受容者梁发と洪秀全の訳語理解

第三節 『万国公報』で行われた「聖号」論争中の中国人作者による訳語理解

##### 第三章 20世紀前半における **God** の受容状況

第一節 キリスト教神学者による上帝観の協調

第二節 キリスト教影響下の現代文学作者による受容

##### 余論：受容の角度から訳語問題への再考察

一、翻訳可能性への再考察

二、解釈への再考察

三、伝達への再考察

上編第一章では、宣教師たちによる訳語論争の歴史を明末のカトリックによる論争から1850年代までの論争、1870年代と1890年代まで、各時期における論争を包括的に扱い、訳語論争の全体的な歴史を描いている。このような歴史的記述は、著者が言っているような本書での基礎であるだけでなく、訳語論争に関するあらゆる議論の土台であるがゆえに、その資料としての価値は大きい。

第二章では、訳語論争の中で、宣教師たちが残した資料の中で、研究者たちにより頻繁に取り上げられていないが非常に重要な『教務雑誌』(The Chinese Recorder)に載せられた論争文章を対象に、宣教師の間の主な争点を整理する。これらの争点は、宣教師たちが訳語を選択する際に影響を与えた四つの要素—原文、受容言語、読者と翻訳者自身の伝統及び個人的傾向—をめぐる異なる理解からなっている。原文への異なる理解とは、Elohim、Theos がどのような性質の名詞なのかに対する異なる見解である。すなわち総称的な名詞であるかどうかを巡っての議論であるが、それは原文での用語が文法的には総称的な名詞を持って、唯一で最高の存在を指示しているが、異なる言語である中国語においては同じ使い方がないからである。中国語において「上帝」と「神」との間の論争であるが、これらの用語が中国語でどのように理解されるのかに対しても議論が分かれる。これらの用語に対する異なる理解には、中国の宗教と言語に対する異なる理解が同伴するのである。ま

た当時の読者の訳語選択の意見を参照にしようという動向が見えるが、その際に、当時の中国人キリスト者である読者の理解に対して信頼と不信頼の態度に分かれる。論争の中で、宣教師たちは西洋における神の訳語の翻訳伝統を参考にし、また中国語に翻訳されてからの伝統をも参考にした。これらの要素を考察しながら、第三章では、訳語論争の中で、宣教師たちが提案した解決法とこれらの解決法の中で表れている傾向をまとめる。一つは妥協の方法であり、もう一つは妥協を拒否する方法である。妥協には、妥協して共存する方法と、妥協して統一する方法がある。不妥協を提唱する宣教師たちは、調和合一を強制的に行うより、この問題をそれからの歴史に任せる態度をとった。

これらの歴史資料を土台に、第四章では以下の三つの問題が論じられている。

一、翻訳可能性の問題。翻訳を静的な事件（伝達されるメッセージと原文のメッセージ、受容されたメッセージと伝達されるメッセージ或は原文のメッセージが一回限りの対等を求める）として見るなら、翻訳は不可能である。しかし、翻訳を動的なプロセスとして見る時、伝達者と受容者の相互作用の中で、伝達の歴史発展のプロセスの中で、翻訳の可能性を見ることができる。

二、解釈の問題。横向きの静的側面から見ると、解釈間には調和できない衝突が存在するが、動的側面からみると、宣教師と宣教師、宣教師と中国文化および中国人読者の間の長期間の相互作用と視野の融合が解釈の衝突を解決するのに、契機を提供してくれる。

三、伝達の難問。伝達プログラムの中で、伝達者は受容者によるか原文によるか、伝達速度を重視するか伝達の正確性を重視するか、という苦境に出会う。伝達者と受容者間の相互交流およびその交流による受容者の変化が、このような苦境から脱出する方法を与える。

下編は三章に分けられる。第一章の内容は、明末清初のカトリック受容者による訳語理解である。徐光启、李之藻、杨廷筠、王征、严谟など、典型的なキリスト者になった士大夫と、反キリストの士大夫を考察対象にし、彼らの作品に現れた訳語への主張或は「上帝」、「天主」が伝える **Deus** 概念への理解を通して、次のようなものが見出される。一つは、受容者としての中国士大夫は **Deus** と中国の上帝或は天の相違点を理解することができる。訳語の選択は、宣教師たちが伝えようとする **Deus** 概念を完全に隠してしまうことはない。もう一つは、彼らが儒教的観念を完全に抜き出すことができず、**Deus** と儒教的上帝/天観念との相同/類似点から **Deus** を受容し、両者を調和させるか両者間の相補う点を求める。特に儒教の上帝観を補うことを求めた。しかし、ここで注意すべきことは、儒教の上帝観の中で **Deus** との類似点を探すとき、彼らの上帝に対する解釈はもはや純粋な儒家士大夫的な解釈ではなくなっていることである。解釈の主体は伝達者との相互作用の中ですでに変化し、儒者という身分のほかにはカトリック信者の色彩を帯びている。そのため、**Deus** と儒家経典に対し新しい理解が生じた。

第二章では、19世紀プロテスタント受容者の理解を整理する。取り上げるのは初期の受容者梁发、洪秀全と後期に『万国公報』の「聖号論」に参加した中国人作者群である。こ

これらの人たちが残した文章を分析することを通して、19世紀という文脈に置かれたプロテスタント受容者たちが God をどのように認識したのか、また彼ら自身の環境からどのような創造的理解がなされたのかをみる。場合によっては God 概念を基礎に改造を行い、場合によっては God が含んでいる様々な意味の中から選択と強調を行った。彼らの God 理解に影響を与えた生存環境には以下のようなものがある。すなわち、徐々にその影響力が弱まっていくがまだ完全に消えてはいない儒家の伝統的な上帝観、民間宗教の多神的信仰と中国社会に置かれたキリスト教徒の曖昧な身分等である。

第三章では、20世紀前半に God が中国で受容された状況を扱うが、特に、その以前のどの時期でも起きなかった激変が受容にもたらした状況に注目する。この時期の知識人受容者の中には、一般の人文知識人以外に、キリスト者である知識人(主に神学者)とキリスト教の影響を受けた現代文学作者という二種類の人たちがいる。「五四新文化運動」とともに訪れた西洋科学の理性的観念、特に進化論はキリスト教の上帝観に大きな打撃を与えた。多くの知識人たちは進化論を持ってキリスト教の神に反対し、上帝概念の中の神秘的な内容も衝撃を受け、否定され排除された。民族矛盾とキリスト教と帝国主義の関連が中国でのキリスト教に衝撃をもたらし、キリスト教の神理解に影響を与えた。またその時期に個人と国家が受けた苦難と新文化再建が、神観に挑戦を挑んだと同時にキリスト教の神への創造的理解に契機を与えた。共通の時代状況におかれながら、神学者と現代文学作家のキリスト教の神に対する理解と受容は類似点と相違点がある。本章で神学者として取り上げるのは趙紫宸、吳耀宗、王治心、徐松石などであり、現代文学作家としては冰心、许地山、曹禺、蕭乾などである。これらの個別事例の分析を通して、彼らの受容状況をみると共に、文学と神学の間で相互にヒントを提供することができるかどうかを考える。キリスト教の神が挑戦を受けている状況下において、基督教の影響を受けた現代文学作家たちはこの概念を借用するにあたって、様々に異なる反応を見せた。この時期における受容は、より多様な側面から受容者の創造的理解と受容を表している。

余論部分は、下編内容のまとめであると同時に、受容状況の視点から上編第四章の考察に対する再考察でもあり、上編考察への強調と補完であり、全文に対するまとめである。

#### 一、翻訳可能性への再考察

上編で取り上げた翻訳可能性の問題は、受容者への考察から見ると、翻訳は可能であるといえる。翻訳された瞬間から見ると、その翻訳は成立しないかもしれないが、長い歴史の中で見ると、翻訳にふさわしい用語が作り出されるのである。ただ必要なのは、その用語と指示対象間の関係を築く努力である。このような創造プロセスは伝達者と受容者の相互作用のプロセスである。

#### 二、解釈への再考察

翻訳がなされた後、最も大事なものは受容者の解釈である。訳語は翻訳者の手から離されると、コントロールできなくなる。訳語は受容者の選択、改造、利用を通して、受容者が生存する世界に溶け込まれない限り、本当の意味での生きた訳語にはならない。

### 三、伝達への再考察

受容者の解釈は、制約の力が全く存在しないと、変形をもたらしてしまう。受容者による解釈は伝達者の規約を受けないといけない。

伝達は、伝達者と受容者の間に継続的な交流がなされるプロセスである。両者は相互に促進させると同時に相互に制約する。伝達者は原文の意味に基盤を持ちながら、純粋な伝達の不可能性を認識し、受容者の文化の中での解釈を尊重しながら内容と程度を制約する。反面、受容者は、自分の解釈の価値に基盤を持ちながら、受容できない内容に対して、異質性の価値を認め、自分の限界に気づき、この異質なものが将来に受容できる可能性を認める。

以上が、内容のまとめであるが、全体の内容を四つの部分に分けてみることができる。第一部分は、第一章にあたる内容であり、訳語論争の歴史をまとめて整理したものである。すなわち訳語論争そのものであり、全体の基礎になる部分である。第二部分は、第二、三章にあたる部分である。ここでは、訳語論争からみられる、宣教師を主体としてそれぞれの問題に対する考察である。第三部分は、下編にあたる部分である。ここでは、受容者である中国人を主体として、神の訳語をどのように理解したのかを歴史順で整理している。最後は、第四章と余論である。この二つの章では、まったく同じ問題を異なる要素を加えて論じている。

本書のもっとも大きな特徴は、訳語論争を文化交流の過程として理解し、その過程の各要素を意識して分析を行ったことである。このような視点は、程が钟鸣旦の『文化間遭遇の方法論：十七世紀中欧の文化間遭遇を例として』を参照し、その中で提唱された文化間遭遇様式をもとに、訳語論争を分析した結果である。钟はまず文化間交流に影響を及ぼす要素を五つ取り上げる。即ち、伝達者、受容者、メッセージ、手段と観察者である。程が訳語論争自体の記述以外に、伝達者である宣教師と受容者である中国人に大きく分けて論じているのは、まさにこれらの要素を意識していたからである。それだけではなく、钟が提唱する「相互交流類様式」というモデルで聖書漢訳という出来事を分析しようとしたからである。

「相互交流類様式」は、交流が伝達と受容を含むことを受け入れるが、双方向的であるとする。即ち、伝達は宣教師から中国人へという一方向的であることを退ける。同様に、受容も中国人が宣教師から受容するという一方向的思考を退ける。ゆえに、宣教師と受容者の両方への考察は必須になる。またこの様式では、異なる理解を誤解ではなく、新たな創造としてみる。著者は、宣教師と受容者のどちらか一方の立場に立って、相手の観点を評価したり批判するのを避け、できる限り事実そのままを記述しようと努めた。

この様式のもっとも根本的な基礎をなすのは、アイデンティティー概念である。即ち、アイデンティティーは固定不変であるのではなく、他者(関係におかれた他者)との関係の中で形成されるとする。従って、「理解」とはプロセスであり、他者と遭遇した結果である。

また、著者はこの様式の中心概念として「空間」を指摘する。「文化の創新」とは、伝達者と受容者の「間」で、主体と客体の間で、自我と他者の間で、新しい空間を作り出すことである。この新しい空間は、文化遭遇の結果である訳本として現れる。

もう一つの中心概念は「張力」であり、張力は相互作用プロセスの基礎である。相互作用は永遠の張力だとされる。即ち、伝達者と受容者の間の張力、理解可能性と他者理解の不可能性の張力である。張力は、伝達者と受容者の間だけでなく、伝達者の間と受容者の間にも存在するのである。第二章と第三章に対して、著者は、「歴史資料の整理であり、この歴史の複雑さを描こうとした。しかしこの歴史の描写は研究意図の支配を受ける。ここでは、伝達者としての宣教師たちが、中国文化及び中国人読者との接触の中で変化し、伝達の歴史の中で変化するのを表そうとした。また、このような変化が翻訳と伝達に及ぼした影響を顕わにしようとした。それと同時に、翻訳者たち内部での張力と、張力間の調和及びその翻訳論争への推進を浮き彫りにしようとした。翻訳者たち内部での張力には、宣教師と中国文化及び中国人受容者の間の張力が含まれており、このような張力の変化も論争の発展を催すのである」と説明する。

訳語論争の先行研究としては、まとまったものとして最も参考する価値があるように思われる。特に、基本的な歴史資料を最も包括的に扱ったことは、評価すべきである。また、受容者への考察という視点は、訳語論争を論じるに当り、不可欠の要素であるように思われる。本書で取り上げている受容者側の資料は、中国におけるキリスト教受容の歴史資料としても価値があると思われる。

しかし、受容者への考察が「上帝」のみにとどまり、「神」への考察が見当たらない。これは資料自体の稀少から来る結果であるように思われるが、訳語論争が「上帝」と「神」の論争であることを考えると、物足りなさを感じざるを得ない。また、聖書翻訳の中で出現した訳語論争をキリスト教の聖書翻訳歴史の中で論じる必要性も感じる。中国において、聖書翻訳は文学研究の分野で珍しい研究対象ではない。それゆえ、聖書翻訳に対するさまざまな研究成果を読むことが可能である。しかし、文学書の翻訳ではなく、キリスト教正典の翻訳としての研究も読めることを期待したい。